あいのその　2023年5月号

「主は倒れようとする人をひとりひとり支え
うずくまっている人を起こしてくださいます」（詩編145編14節）

愛の園保育園　042-325-1045

テレビドラマ『3 年 B 組金八先生』の中で語られ有名になった台詞のひとつに「“人”という字は、ひととひととが支え合っている」というものがあります。この番組の影響で「人」という漢字の成り立ちをそのように解釈している人はとても多いと言われています。しかし残念ながら、この解釈は文字学的には明らかに誤りだそうで、「人」という漢字は、正しくは「人が立っている姿を横から見た形」がその由来であり、左側の線は人の腕、右側の線が体を表している一人の姿とのことです。

しかし人と人とが支え合っているという解釈は金八先生が初出ではありません。明治から昭和初期にかけて活躍した教育者・新渡戸稲造が、このことをよく口にしていたといわれているからです。新渡戸は漢字をわかりやすく説明するために、文字を分解して説明する方法を多用していました。それは文字学的には誤りではあっても、あえて漢字の正確な語源よりも、人間が生きる上で一番大切なことを自らの生徒や自分を慕う人々に伝えようとしてこのように語ったと考えられています。ちなみにこの新渡戸は、非常に敬虔なキリスト者であったことでもよく知られています。

旧約聖書・詩編145編には、神の圧倒的な偉大さが謳われています。しかしそれほど大きな存在であるにもかかわらず、神は倒れようとする人を支え、うずくまっている人を起こしてくださる方であるというのです。私たち人間は誰もが、神がその手を伸ばして支えてくださらなければ倒れてしまうような弱く小さな者です。しかも時に、その支えも忘れて、まるで自分一人の力だけで踏ん張って立っているように思うことさえあります。それでも神は、そんな人間を変わらず支え続けてくださる方なのだということを、この詩の作者は語るのです。ちっぽけな、吹けば飛んでしまうような私のことも、決して忘れたり放っておいたりはしない。そして、まさにそのためにこそ神は、小さな一人の人間の姿として、すなわちイエス・キリストとして世に来てくださったのです。「人」という字の半分は私、そしてもう半分は、その私を支えているイエス・キリストなのかもしれません。

（牧師　西脇　正之）